

戸田 有二 編

『福島県油王田遺跡発掘調査報告書』 安達町

藤 木 邦 彦

先般来建設省所管一般国道四号福島南バイパス建設にあたり、その路線上にかかる福島県安達町内油王田の中世城郭跡の発掘調査が急務となった。そこで建設省福島工事事務所と安達町教育委員会とは、その発掘調査の担当を、本学文学部考古学研究室助手戸田有二氏（本学文学部第一回卒業生で、考古学の大川清教授が愛育された新進の考古学者）に依頼された。ここに戸田助手は多数の調査員・補助員を初め地元関係諸氏の協力を得て、ほぼ二年間鋭意この事業を遂行し、その成果を内容とする本報告書を提出、併せて諸方面の希望に応じ、許可を得て本書を公刊された。

本遺跡には、当初から中世以前の遺跡の併存することも予想されていたが、発掘調査が進行するに従い、果して奈良平安時代の竪穴式住居跡等が確認された上、さらにその下層に先土器時代終末期―縄文時代草創期の石器包含層も見され、ここに本遺跡はそれらをふくめての複合遺跡となったものである。然しながら筆者は考古学者ではないので、その成果についての評価は避けさせて頂き、主としてその歴史的価値と附録の文献について述べ、取敢えず本書の出現に慶祝の意を表しておきたい。

本書は、先ず「I遺跡の位置と歴史環境」（戸田氏）でその大要を示すが、筆者もほぼこれによって初步的に略記しておこう。本遺跡は本県安達町のほぼ中央に位置しているが、これは本県の中央部を南北に走るいわゆる中通りのう

ち、郡山盆地から福島盆地に入る途中、古来のいわゆる仙道の東方、さらにいえば東北本線安達駅の北北東方、本線の東側近くにあたる。この地域は西方に安達太良山を仰ぎ、平坦地はむしろ少く、全域に小丘陵が起伏しているが、その半数以上が緩かな傾斜面をもち、かつ水源に恵まれて居り、これが古い原始古代から中世にかけて多くの遺跡が営まれる要因となったものであろう。本県の地域は大化前代からすでに一〇前後の国造が現われて居り、本県より北の東北地方がなお化外の地であったのに対し、中央の大和國家の版図に編入されていたわけだが、平安時代には安達郡・安達郷も設置され、官道の駅としても本郡内に安達・湯日の二駅が置かれた。中世に入っては、この地域は西を安達太良山系、東及び南は阿武隈川、北は水原川を以て遮られる環境が自然の要害をなしていたので、ここに大小の中世城郭（山城）が築かれたことは首肯でき、とくに天正年間に北方から侵攻する伊達氏と、これに対抗する二本松畠山氏との間に激烈な攻防戦が展開された際に、重要な役割を果たしたわけであろう。この油王田遺跡もその一丘陵上に築かれた郭城跡で、付近の住民より「館山」と呼ばれて「天正年間正月に落城」した城と伝承され、また『相生集』には、『伊達日記』に伊達成実がいう「拙者陣場油和田と申」は、恐らくこの油王田館跡を指すものと推定されている。

「II遺構と遺物」（同上）では、発掘された遺構・遺物について詳説し、「III考察と今後の課題」では、「油王田遺跡石器産出層について」（鈴木敬治氏）、「油王田遺跡出土の石器とその問題点」（矢島俊雄氏）、「油王田遺跡出土の木製櫛について」（山内文氏）、「二本松・油王田地区地形に関する軍事的考察」（青山利夫氏）、「安達町に於ける館跡と歴史地理的環境についての二・三の考察」（戸田氏）、「油王田遺跡出土TK-384・TK-385の放射性炭素C-14時代測定について」（小林裕美氏）の各専門学者による六編の論文を収め、最後に「IVまとめ」（戸田氏）で、今次発掘調査の成果を総括し、併せて今後の研究の展望

を示している。「V附」は附録として「成田頼直著『積達館基考補正』」を活字化して復刻し、これにその解題（松沢・戸田氏）・付表を加えている。

『積達館基考補正』は、文政二年二本松藩士成田頼直が、安積・安達二郡における中世居館跡について、館主及び戦国末期の戦乱を主として考察した著書である。頼直は、藩の郡奉行として藩内各地を巡行し、のち郡代を経て城代職となり晩年は引退して著作活動に没頭した。或いは史蹟・名勝・社寺を現地踏査し、或いは旧家について古文書類を採集するなど、熱心な学者であった。従って、天保十二年大鐘義鳴によって書かれた『相生集』以来、文化元年以前に成った安斎彦貴著『積達古館弁』及びこの頼直の著書を参照すべきことが望まれていたにもかかわらず、『古館弁』の方はよく残存しているが、『館基考補正』の方はその存在が容易に見当らず、「まぼろしの書物」と呼ばれていた。然るに、今次の発掘調査に際して、国立公文書館内閣文庫にその写本（五卷七冊、明治十四年二月徳川昭武蔵本騰写本、なお「樹下」の校合印あり）が保存されていることが判明したので、許可を得て、本報告書に収載されることになったものである。その編纂には、国士館大学図書館の松沢和彦氏（明大文学部史学科卒）と戸田氏とが共同してあたり、その間しばしば専門諸家の教示を仰いで完成したものであるから、ほぼ信頼するに足る最初の刊本となったといえよう。さらに「諸文献に見られる積達二郡中世城郭一覽」（付図参照）として、前記三著に載せる多数の館について、その地理的位置を表示すると共に、現行地図によってその所在を逐一考定し、また「積達二郡に於ける中世城郭跡一覽」にもその全城郭跡につき現行表示法を用いて正確に表記している。以上の附録には、いずれも両氏の周到な用意とその意欲的な努力を高く評価すべきものがあり、本報告書の大きな特色の一つをなしていると思う。ただ、本報告書全体を通じて多少誤植を見かけることが惜しまれる。

（B5判、全一冊、本文四三〇頁、図版八〇頁、挿図七四、付図八枚、建設

省福島工事事務所・福島県安達町教育委員会、昭和五十六年三月二〇日発行、
巖南堂書店発売、定価八、五〇〇円）